
真実

南波航助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実

【Nコード】

N2920D

【作者名】

南波航助

【あらすじ】

とある中学校で教師が殺害された。それも首をナイフでひと着きされたという不自然死だった。教師の担任クラス全員は犯人が誰だかを知っていた。誰一人として言うことはなかった。事件から十年の月日が経ち、今年の十二月八日に事件は時効を迎えようとしている。事件発生時新米刑事であつた三田春一は、時効間近の事件に興味を抱いた。頭の固い女性刑事浅野美和子と共に、この難事件を解き明かそうとする。果たして事件の真実とは。

1：事件

嘘を付いてしまった。今までそんなこと、無かったのに。それも、多くの人間にだ。僕はどうすれば良いんだろう。中学だってもう行きたくない。ゲームをしている方がよっぽど楽しい。みんなうつとおしく感じる。僕はベッドの上でそんなことを考えていた。小さな部屋。それが僕の居場所。

「浩助、ご飯」

母親のうるさい声がまた聞こえてきた。今呼ばれたように、僕の名前は浩助。川野浩助だ。

「今行くよ」

「早く来なさい」

「分かってるから」

どうして親つてのはここまでしつこいのだろうか。僕の心は熱くいらだちを覚えていた。ああ、どうしても気になってしまう。あの嘘が。僕は階段を駆け下りた。一段一段が母親に会いたくないと物語っているようだった。

家族四人が食卓に座った。僕の兄が隣で姿勢良くそびえ立っている。天才だからそう思えてしまうのは仕方ない。

「あなた、庄一ね、今度学校のスピーチコンテストに出るんですって」

「ほほう、それは良かったな」

父親はいい加減だ。どうでもいいの一言につきていた。話題になるのはいつも兄ばかり。もうこんな暮らしは嫌だ。死にたいと何度思ったことか。いつもの用にご飯は終わった。そのまま僕は部屋に戻った。「勉強しなさいよ」と母親に言われながら。

「はあ」

僕は大きいため息をついた。あの嘘、どうしようか。携帯が鳴った。「もしもし」

「あ、浩助えちよつと良いか」

「良いけど」

親友である昌広だった。僕はどきつとした。

「あのことなんだけど」

「うん」

汗が額から流れ落ちた。

「呼ばれたんだろ、学校に」

「ああ」

「何て言った？」

「何も知らない、って」

「親にもか？」

「そつだよ」

「分かった。お前もその気なんだな」

「・・・・・・うん」

「分かった、じゃあなあ」

「おう・・・・・・」

電話が切れた。胸が痛い。この感覚は何だ。僕は学級長だ。今日の学校でのこと、常識では考えられないようなことが起きたんだ。僕は頭を嚙った。咄嗟にテレビを付けた。予想通りのニュースが流れている。

「今日未明、石川中学校の教員多田秀男さんが何者かによって殺害されました。警察では現在も捜査を進めている模様です。中学生からは何も知らないとの声が多く出されており、犯人は今だ不明です。殺害状況は大変複雑であり捜査は難航しております。多田さんとはもとと理科の教師をしていて・・・・・・」

テレビを切った。かみかみのアナウンサーだ。やっぱりな。死んだんだ、多田先生。明日の学校はこれでやらだろう。

「浩助、明日の学校は休みだつて」

母親がまた叫んできた。

「ああ」

「やっぱりあのことが原因のようよ」

「そうだろうね」

予想は的中した。先生が一人死んだんだ、当然だろう。本当にあいづがやったのか……。警察を巻くほどの事件。犯人を僕は知っていた。同じ組の男子、如月裕也だ。彼は一言で天才と言える様な男だ。クラスのボス。多田先生には恨みを持っていたらしい。彼が僕に言った言葉。「完全犯罪は可能なんだよ」って。本当にやつちゃうなんてな。彼の父親は政治家だし、お金に困ることは無いらしい。クラスのみんなに昨日宣言していた。有言実行かあ。このこと、誰かに言ったら僕も彼に殺されてしまうかもしれない。クラスの誰一人として、このことは言わないだろう。僕は頭を抱え込みながら、そう思っていた。

「この事件、そろそろ時効らしいね」

「え、マジッスか」

俺の名前は三田春一。どこにでもいるような刑事だ。十年前起きた教師の不自然死事件が今年の十二月八日に時効になるらしい。今が十月だから……。後二ヶ月程度か。この事件の時、俺は新米刑事だった。あの頃は興味が無かったが、時効になってしまふとなると少し残念だ。

「で、田辺さん。これって、どんな死に方でしたっけ？」

俺は上司である田辺三郎に聞いてみた。

「えつとねえ……。確かあ、中学の教師がねえ。理科の研究室で、首をナイフでひと着きされて倒れてたんだっけなあ。でもねえ、何の証拠も見つからなかったらしいんだよ」

「へえ、そうなんすか」

俺みたいな頭の持ち主では解けそうにない問題だ。

「ホント、分かんないよねえ」

「はい」

田辺の口癖は語尾を伸ばすことだ。たまに嫌になる。

「何か、気になりますね」

「うんうん」

「俺、調べてみよっかなあ」

気になると行動に移したくなるのが俺の癖だ。

「ここんとこ事件ないし、良いよあ」

何ていい加減な上司なんだろうか。まあ嬉しい限りであつた。

「じゃ、頑張りたいと思います」

「終わつたら仕事やつて下さいねえ」

「はい」

俺は元氣よく返事をしてしまった。この事件には何かある。今更だけど、刑事の勘って奴だつた。

「ならほら、これ使えるんじゃない？」

「何ですか」

「その時のクラスの名簿だよ」

「おお」

「十年前だからねえ、個人情報とかうるさくなかつたもんだから住所も載つてるよ。まあ多分引越してるところが多いと思うけどね」

「借ります」

「いいよあ」

俺はパスとファイルを受け取つた。三日坊主であることも俺の癖であつたから、田辺も軽い気持ちだつたのだろう。

「一人つてのも寂しいっすねえ」

「そうだねえ。あ、ほらほら。浅野くんも一緒にどうよ？」

それまで隣で書類に手をかけ、話に一切入ってこなかつた女に話しかけた。

「私は結構です。仕事がありますので」

「いいじゃないのお、たまにはさあ」

「いえ、職務がありますので」

田辺は浅野に嫌われている。浅野というのは浅野美和子という女で、一年前ほど前からここで働いている。仕事女という感じであった。ルックスは良いのだが、性格がちょっと。

「ほらほら、この事件手伝わないと仕事やらせないよお」

「そ、そんなあ」

おかしな話である。

「分かりましたよ、その代わり、給料はしっかりと頂きますよ」

「いいよいいよ」

いい加減な田辺。

「田辺さん、良いんですかあ？」

俺は思わず聞いた。

「いいのいいのお」

「何ですか？」

「若い二人は難問を乗り越えてくれよお」

意味が分からない。

「ささ、お二人とも早く行きなさい。さ、早く」

「ああ」

俺と浅野は押され、無理やり外に出されてしまった。俺はドアの間から中を覗いてみた。田辺が携帯ゲームを出していた。笑顔が溢れている。そういうことや、ゲームを職務中にもやるために俺らを・・・。まあこつちとしてはいい話だ。このままにしておこう。

「さ、浅野。調べるぞ！」

「・・・・・はい」

そんなこんなで俺らはこの難事件を調べることとなった。

2：疑惑

「おい、寝るなよ！」

「あ、すいません」

俺は助手席にいた浅野の頭を叩いた。

「次、当時の学級長だった川野浩助の所行くぞ」

「はい」

赤いワゴン車のエンジンをかけた。俺らは十年前の教師変死事件の真相を探るため、調査を続けているところだった。

「すいませ〜ん」

浅野がインターホンを鳴らした。ドアが開き、一人の女性が現れた。

「何ですか？」

「ちよつとお話がしたくて、あの〜浩助さんはどちらに？」

「浩助？浩助なら隣町にいますけど・・・どちらさん？」

「申し遅れました。警察の物です」

浅野はサツと警察手帳を見せた。女性の目が変わった。この事件がよほど衝撃的だったものなのかもしれない。

「何か、やったんですかあの子」

「いえ、そう言うわけでは〜」

俺は汗をかきながら手を振った。女性から詳しい居場所を教えて貰い、俺らはその場を後にした。再びエンジンの寂れた音を鳴らしながら車を走らせた。

「おいおい、もしかしてここかよ」

俺は大層立派なお屋敷を指さした。

「そうですね」

浅野は冷静に言った。インターホンは無くライオンの顔をしたノックを二回ほど鳴らした。

「どちらさん？」

さっきの女性にそっくりな二十代前半の男が現れた。

「浩助さんですか？」

「そうだけど」

「お話をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「え、セールス？」

「違います！」

浅野は警察手帳を見せた。

「何の用ですか、刑事さん」

「お邪魔させて頂いても良いですか？」

「あ……はい」

俺らはずうずうしくも中へと足を踏み入れた。

「ハーブティーです」

それはそれは美しい女性が紅茶を入れてくれた。

「家内です」

「そうなんですかあゝお美しい」

「いえそんなあ」

女性は顔を赤らめ、キッチンへと戻った。

「寝るな、浅野」

ソファーにもたれかかりまぶたを閉じている浅野を小声でしかった。

川野は苦笑いをしていた。

「す………すいません！」

いきなり大声で浅野は叫んだ。

「馬鹿！」

俺は頭を叩いた。

「大丈夫ですよ」

川野は紅茶を飲みながら言った。

「ところで川野さん、お仕事は何を？」

「私ですか？ いやあゝちよつとIT関連の仕事を」

「なるほどねえ」

やっぱり世の中は足より頭なのか、と俺は感じた。

「あゝ、刑事さん。話って何ですかねえ？」

「あ、すいません。お話というのは……十年前の教師変死事件のことについて何ですが。当時あなたはクラスの学級長でしたよね。それでお話と思いまして。ちょっと気になってしまったものでえ」

川野の顔色が変わった。異常なほどにだ。紅茶を降ろし、口を開いた。

「ああ、あの事件は幼い私にとって衝撃的なものでしたよ」

「そうだと思います。あのあゝもうしつこく聞かれたと思うのですが、何かお心当たりはありますかねえ」

「いえ、特には無いですよ」

「そう何ですかあ。では、多田先生を恨んでいた生徒などはどうでしたか？」

「はあ……まあ生徒を平気で殴る先生でしたから、嫌われてはいましたよ」

「ほほう、どんなことで？」

「忘れ物だとか、授業態度とかで」

「中でもどんな人が恨みをもっていましたかねえ」

「いやあゝ十年前のことですからあ。ちょっと覚えてないです。いません」

川野は少し笑いながら言った。

「ありがとうございます。失礼します」

「え、もうですかあ？」

「はい。またお伺いするかもしれません」

「また？……いいですよ。ではお気を付けて」

「ありがとうございます」

俺らは家を後にした。最後まで川野の奥さんはお辞儀をしていた。良くできた人間だと俺は感心していた。となりのこいつに比べると正反対のようだ。

「三田さん、何か今思いましたあ？」

「いや、何も」

こいつ勘が鋭いな、そこだけは感心できる。

「ところで、何でもまた来る何て言っただんですか？」

「いやあ、ちよつとね。川野、何か知ってるぞあいつ」

「何ですか？」

「あいつ、俺らが刑事だと言って十年前のことをはなしたら途端に顔色を変えた。異常なぐらいだっただろ」

「そうなんですかあ？私寝てたから全然覚えてないです。ははは」

浅野は何故か笑っている。こいつ、馬鹿か？と俺は思った。

「あいつの話じゃあ恨んでいる奴は大勢いるって言ってたな。生徒全員回るぞ」

「ええ、本当ですか。嫌だなあ」

「黙れえい」

俺は一気に車のアクセルを踏んだ。

「あ、あそこにいるのって如月真之介じゃないですかあ？」

浅野は窓の外を指さした。

「総理大臣の如月かあ？」

「はい」

「ホントだ。演説が何かかなあ」

俺はどうでも良い思いで総理大臣を横切った。

「そつえばあ、如月真之介の息子も優秀なんだってなあ」

「そうなんですか」

「何か、科学者らしいよ」

「すごいですね」

どうでもいいような感じに浅野は言った。

「確かあ、名前は如月裕也だったけなあ」

俺は自分で言った言葉に衝撃を受けた。

「あれ、如月裕也って……おい浅野、ファイルにその名前無かったか？」

「えっとですね」

浅野はのろのろとページをめくっていく。

「あ、ありますよ。如月裕也って」

「総理大臣の息子、天才科学者……なんかありそうだな。・
・……おい浅野、聞いてんのか？」

浅野は寝ていた。いびきをかきながらだった。

「怪しいなあ……まだまだ調べる価値はありそうだ！」

俺はアクセルを強く踏んだ。

3：対面・解明

「刑事さん、そんな昔のこと覚えてるわけ無いでしょう」

「そ、そうですね？わ、分かりました」

俺と浅野は如月裕也に聞き込みをしていた。

さすがに天才というだけはある。言葉一つ一つに説得力があるのだ。

「あの、川野さんの話では多田先生を恨んでいたとか？」

「ああ、でも刑事さん。そんなに一人殺せますか？第一子供が教師の首をナイフでなんてばからしい。ハハハッ！」

確かにそうである。子供が大人を刺し殺すなんて、ありえないかもしれない。

「そうですね。分かりました、調べ直しますね」

「もしかして、僕が犯人だとか？ハハハハハッ」

「あ、ハが二個増えた」

浅野がぼそつと言った。

「馬鹿やろう！」

どうでもいいところで食いつくところがこいつの悪いところだ。

「如月さん、あの、あなたはどう思いますかね？」

「この事件ですか？」

「はい」

「まあ、殺人ですよ。犯人の痕跡がないなら、仕組まれた犯罪じゃないですか？」

「ほほう、ありがとうございます」

俺らは科学の臭いが漂う部屋を後にした。

仕組まれた犯罪？だとしたらどんな方法があるのか。俺はふと事件の様子を考えた。被害者の多田は喉を仰向けの状態で刺された。普通、そんな刺され方するだろうか……。

「おい浅野、部屋の写真を見せてくれ」

「え、私のですか？」

「違う！職員室のだ！」

「は、はい」

どこまであほなんだか。

「これです」

「んゝ異常なところは……あつた！」

俺は写真の床と天井を指さした。黒っぽくなっている。しめつてい
るようだ。あせって記録を確かめてみる。

「天井と床に水の後……これは、どういうことだ。ろくに
調べもしないで……これは殺人と関係があるかもしれんぞ
！」

「へえゝで？」

「だから……分かったぞ！」

「え、嘘だあゝ」

全く信じない浅田を放っておきながら俺は話し始めた。

「首を刺されたんじゃない、首に、ナイフが落ちてきたんだ。多田
は当時睡眠状態だったんだろう。つまり、仰向けになっているとこ
ろに天井からナイフがストーンって！」

「あのしみは？」

「水……氷だ！氷でナイフを固定したんだよ、やがて氷が
溶け……首に落ちた」

「そそ、それだあ！春一さん、それですよ、犯人はその手を使つた
んですよ」

俺は確信した。この事件の真実が分かってきたのだ。これは、仕組
まれた殺人だ。後は情報を集め、犯人を突き止めるだけだ！

4：推理

俺と浅野は、殺人方法を偶然にも解き明かしてしまった。たぶん、この考えで良いのだろう。残すは、犯人を捕まえるだけだ。時効日は十二月八日。今日は十一月二十八日。まだ日にちはある。

「おい、浅野！お前は誰だと思う？」

「私ですか？えっと、んつと……川野さん？なんか、怪しいです。恨んでいる人がたくさんいた、なんて言いませんよ普通」
「なるほどなあ」

「で、春一さんはどうなんですか？」

「俺かあ？俺はなあ、あのクラスメイト全員だと思うぜ」

「はあ？どういうことですかあ？」

「今まで、いろんなところに聞き込みしたけど。みんなおどおどしてた。そして挙げ句の果てには恨んでいた人はたくさんいた、で店じまいだ」

俺は誇らしげに言った。

「と、言うことはあ？」

浅野は顔をひつくるめて覗き込んできた。運転に集中できない。今向かっている所は浅野に内緒にしている。

「犯人を全員が知っているってことさあ、隠し通している。つまりだ！」

いきなり俺が叫んだのを聞き、浅野はびつくりした。

「犯人は、大物ってことさ。言ったら殺される。そういう思いを持たせてるんだよ」

「なるほど……ってことは、副学級長の田中さんかあ！」

浅野は自分の手を叩き、納得したかのように頷いた。

「なんでだよ？」

「だって、彼女、すごーい美人だったから。逆らえないんじゃないんですかあ？」

「違つよ、第一俺はその田中とかいう名前自体忘れてたよ」

俺はことごとく突っ込んだ。

「犯人はなあ、如月だ。如月裕也だ！」

「へえ」

やけに無関心だった。

「何だ、その態度はあ？」

「だって、そんな証拠が無いじゃないですか」

「ん、確かに……相手は政治家に科学者。こんな推理だけじゃあなあ」

俺は頭を嚙った。

「決定的な証拠ですかあ？なら、川野さんに言って貰うつてのはどうです？」

「川野に？十年間も黙ってたのに、そんなこというかよ！」

俺は完全否定した。

「私に良い考えがありますよ、彼を騙すんです。如月が逮捕されたから、あなたが知っていたということも分かりました。だからその時の話を聞かせて下さいって」

「卑怯だなあ……」

「黙ってる方が悪いんですよ」

「うん」

俺はためらった。

「きつと、川野が言えば、他の人たちだって言いますよ」

今日の浅野はやけに積極的だ。何かあったのだろうか。

「でもなあ。騙すつてのもなあ」

「隠してるのはあつちですよ！」

「隠してるかどうかも明確じゃないんだぞ」

「分かりましたよ、じゃあ春一さんは別のことを調べて下さい。私は、この件に関して……自力で調べますんで！」

浅野は車から出て行ってしまった。

「ちよつと待てて！」

呼び止めてもこっちを振り向かず、走ってどこかへ言ってしまった。
焦って電話をかけても出てはくれなかった。

「何であいつ、あんなに積極的なんだ……あ！」

俺は思い当たる節があった。彼女の弟のことだ。彼女の弟は嘘つきだった友人に金をだまし取られ、借金に追われる貧しい生活をしているのだ。嘘が、嫌いなのだろう。しかし、その嘘をばらすために嘘を使うのもどうか……。まあ後のことは彼女に任せよう。

俺は他に何か情報が無いか、調べることにした。

5：調査

俺は、浅野と別々に調べることにした。

「どうしっかなあ……」

犯人は如月裕也。そう俺は考えていた。証拠が無い。どうするべきか。

俺は赤いワゴン車の中で考え込んでいた。

「こういうときは、田辺さんに聞いてみるか！」

俺は電話を手にした。

「もしもし、田辺さん。ちょっと相談があつて」

「え、僕に？ ちよつと待ってね。今……よし、サードステ
ージクリアだ！」

どうやらゲームに熱中しているようだ。

「で、何？」

「あの、大体の犯人の目星はつきました。殺し方も、一応分かり
ました」

「すごいじゃん！」

田辺は驚いているようだった。本当にここまで調べるとは考えてい
なかつたのだろう。

「それで、証拠が無くてですね。何か、良い方法ありませんかねえ
？」

「そつだなあ……僕が昔調べた事件じゃあ、複雑な仕組
みの殺し方なら、その道具の出所を調べてみたら意外と犯人が分か
つたよ」

「ああ……なるほど。氷の出所かあ」

「氷？ 何それ？」

「良いんで良いんです。ありがとうございました」

俺は電話を切った。

たまには良いことも言うものだ。ありがたい。

「氷の出所を調べてみるかあ」

俺は早速当時の生徒、特に如月裕也の周りのことを調べた。

すると、偶然にも一つの情報を見つけることが出来た。如月裕也の父、如月真之介は氷製造会社と政治がらみで手を組んでいたらしい。もしかすると、氷の型を作らせたのかもしれない。

俺はその氷会社、「アイスマン」の社長に会いに行くことにした。

「十年前のことなんですがあ」

「はい、何でしょう」

刑事だと自分が伝えると、アイスマンの社長は快く話を聞いてくれた。

「如月真之介さんはご存じですよね」

「もちろんですよ。今じゃ総理大臣ですからね」

「特注の氷を作って欲しいなんて、言われませんでした」

「ああ、言われました言われました。よく知ってますね」

予想的中だ。その形さえ分かれば俺の推理が証明されるかもしれない。

「型とか、ありますかね？」

「探せば多分あると思いますよ」

「見させて下さい」

「良いですよ」

社長は三十分ほど調べてくると言い、この場をあとにした。自分になにかをやってしまったのではないかと、おそれているようだ。

俺はその間、本を読んでいた。「密室、旅館殺人ミステリー」こういうものが、大好きだ。

「これですこれです」

社長が戻ってくると、大きな型を持ってきてくれた。予想以上に大きい。

「あの、これ作って貰えますか？」

「ああ、明日になっちゃうかもしれないんですけど……」

「良いですよ」

俺は笑顔を浮かべ、明日を待つことにした。

電話番号を伝え、アイスマンを後にした。携帯を開いても、浅野からの連絡はなかった。

勝手な行動をして、本当に大丈夫だろうか。心配にもなったが、自分にはやることがある。

そして、彼女にもやることがある。

明日が正念場だ。浅野からの連絡も、明日には来るだろう。

6：真相

「う・・・・・・・・」

俺は赤いワゴン車の中で目を覚ました。

どうやら寝てしまったのだ。

「やばっ、朝になっちまった」

今頃後悔してももう遅かった。昨日お願いした氷をもらいに行かなければ。

と思ったとき、携帯がなった。

「もしもし」

「三田さんですか」

アイスマンの社長のようだ。

「そうです。あ、氷のことですね」

「そうですそうです。出来たので、取りに来て頂いてもいいですか？」

心の中で、喜んでいる。

「はい。あの・・・・・・・・いくらですかね？」

ここが一番気になるところだった。

「良いですよ、良いですよ。刑事さんのお願いですし。これで殺人事件が解決するのなら」

俺は一瞬顔色を変えた。おかしい・・・・・・・・

「ありがとうございます」

平静を装ったが、社長の言葉のおかしな点を見つけてしまった。

「ではお待ちしております」

電話が切れた。

「なるほど、やっぱりな」

俺は、社長の発言のおかしな点を考え込んだ。

アイスマンの社長には、殺人事件のことなど一言も言っていないかった。

しかし、彼は殺人事件が解決するのなら、と何故か知っていた。

社長も、共犯だ。そう俺は思った。確信ではないが、この可能性に
かけるしかない。

「社長を問いつめてみるか。今日受け取るのは、ただの氷だな・・・」

俺は社長に何を問いたただすか、整理した。

数時間後、社長から受け渡された氷は、予想通り極普通のものだった。

普通の氷が大きくなっただけのものだった。

とりあえず礼を言ったが、これから社長を問いただす。

「社長、これ・・・偽物ですよね」

単刀直入に言った。

「何ですかあ、刑事さん」

「あなたはさっきの電話で、殺人事件が解決するなと言った。私はね、殺人事件のことなど何も言っていないんですよ。どうしてです？」

「そ、それは・・・」

社長は困り果てた様子だった。

「もしもし、浅野か？」

「そうです」

やっと話すことが出来た。

「どうした？」

「川野の証言を得ました」

「どういうことだ？」

「川野を騙してみたんです。如月は逮捕された、だから小学校のときのことを全部話して欲しいって。そしたらですね」

「うんうん」

「如月裕也は、多田先生が殺される前日。クラス全員にこんなことを言っていたそうです。」

完全犯罪は存在する、多田先生を殺す、って」

驚きのことに俺は仰天した。

「つまり、クラス中に……俺が犯人だって言っただってことか？」

「そうです。他の人の話でも、そんなことを言っていたらしいんです」

浅野、でかした！と俺は心の中で思った。

「良くやった！俺もな、氷のことから如月が犯人だということを突き止めた」

「やったじゃないですか！」

「おう。じゃあ署で待つてる」

「分かりました」

事件は解決したんだ。犯人は如月で、父親も協力していた。それで終わりだと、俺はそう確信していた。

7：真実

事件は、幕を下ろした。

「私らが、やったんです……」

俺らは、その一言を待っていた。

「話は詳しく署で聞きます」

浅田は誇らしげに言ったのだった。

俺と浅田は如月裕也に話をし、犯行を認めさせたのだ。

天才のにおいをぶんぶんさせた科学室で、

如月裕也は全てを自供した。

自分が父に頼んだということも、話したのだ。

その際には、総理大臣であった如月真之介までもが辞任を余儀なくされた。

事件は、解決したのだ。

関係していたクラスメイト全員は、それなりの処置を受けた。逮捕という訳では無かった。

如月裕也の、詳しい犯行動機は分からない。

ただ、単純に多田という男を恨んでいたのだろう。

生前、多田はよく研究室で寝ていたらしい。

固定されたイスだったため、寝ている真上に装置を装着したのだろう。

ナイフが挟まれた氷。

実物は、自供させた日、俺が社長から頂いた。それが決定的な証拠となったのだ。

この事件は、十年の時をえてようやく幕を下ろしたのだ。

新聞では号外まで出された。

「総理大臣辞任、十年前の教師殺害認める」

このような見出しが、いくつも出されていた。

「まさか、こんな展開になるなんてな」

「はい」

俺と浅野はテレビを見ながらそう言った。

ここは警察署。壁にはいくつかの賞状が飾られている。

事件解決後、警視庁警視総監から頂いたものだ。

日本中の誰もが驚きを隠せなかった。

俺らは、十年間閉ざされてきた「真実」の扉を大きく開いたのだ。

あっという間だった。

本当にあっという間だった。

こんな事件が、十年もの間伏せられてきたなんて……

真実は必ず表へと出る。

誰もがそう、確信した事件だった。

三年後……

俺と浅野はいつも通り仕事をしている。

三年前のことなど、忘れかけていた。

隣では、新しいゲームを買った男が堂々と遊んでいる。

隣では、くそ真面目に仕事をしている女がいる。

あの日から、俺は度々難事件に手を出すようになった。

今では壁ぎつしりに賞状が並べられている。

これからも俺は

真実を

見つけ出すだろう。

7：真実（後書き）

今まで読んで頂き、ありがとうございます。
もっともつと良い小説を書けるように頑張りたいと思います。
本当に、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920d/>

真実

2010年10月10日14時09分発行